

新陰流伝書『陰流書』の尾張柳生における歴史的位置づけ：

江戸柳生系統の伝書『五卷書』との比較

中嶋哲也（茨城大学）立木幸敏（国際武道大学）

【目的】尾張柳生には、柳生連也斎巖包（1625-1694）の死後 80 年ほどを経て術伝に疎くなった時分に、道統 8 代・柳生兵助巖春（1741-1808）が『新陰流兵法目録口傳書』（以下、「連也の口伝書」と称す）の巖封を解き、元来の術伝に関する「一大光明」を得たとする伝承がある（巖長，1957，pp.178-179）。しかしこの伝承を裏付ける史料はこれまで学術的には明らかではなかった。

ところで、尾張柳生系統の『陰流書』という伝書がある。作者は巖春であり、連也の口伝書から勢法の注意書きを転記したものである。すなわち、『陰流書』は巖春が得た光明とはなんであったかを具体的に検討できる可能性を持つ伝書なのである。そこで本研究では、『陰流書』の内容を検討し、巖春の得た光明とは何であり、どのように得られたのかを考察したい。

【方法】以下の史料を使用した。史料①の内容を史料②・③と比較した。

- ① 柳生兵助巖春『陰流書』（渡邊一郎先生を偲ぶ会編，『渡邊一郎先生自筆 近世武術史研究資料集』，前田印刷，2012 年所収）
- ② 柳生連也斎巖包『新陰流兵法目録口傳書』，1637 年（吉田家蔵）
- ③ 出淵七兵衛盛房『五卷書』，1693 年（筑波大学武道文化研究会編，『新陰流伝書集中巻』，筑波書林，1991 年所収）

【結果および考察】『陰流書』の内容は、新陰流の勢法「三学」「九箇」「天狗抄」「極意六箇条」における各太刀の仕様の説明、「轉」の説明、そして巖春自身の「愚案」である。本研究で注目したのは、「三学」「九箇」の説明である。「三学」から「極意六箇条」までの説明には「本曰」、「巖曰」で始まる連也の口伝書を忠実に転記しているが、それに加えて「又曰」として各太刀に巖春が説明を付けている。このうち「三学」「九箇」には江戸柳生系統の伝書『五卷書』から引いたとみられる文言が「又曰」として記されていた。

『五卷書』全体は元禄六（1693）年に作成されたが、仁義礼智信の 5 編に分けられたなかで、勢法の仕様について記された「仁」の末尾には「慶安五（1652）年」の記載がある。つまり、「仁」は宗冬（1613-1675）の代に作成されたのである。巖春は巖包と同世代の江戸柳生の勢法を研究していたと考えられる。

【結論】巖春は連也の口伝書に拠って尾張柳生元来の勢法を追究するとともに、江戸柳生初期の勢法をも研究していたことが本研究で分かった。今後、巖春が得た光明の内実を学術的に明らかにするためには、連也の口伝書のみならず、江戸柳生の『五卷書』系統の伝書も検討する必要があるだろう。

（参考文献）柳生巖長『正伝・新陰流』，講談社，1957 年